

山中 裕著

## 『栄花物語・大鏡の研究』

思文閣出版 二〇一二年・一〇刊

A5 四〇四頁 七二〇〇円

本書は、今年六月にご逝去された山中裕氏が、『栄花物語』を中心とする一九六四年以降の論考一五本に新稿を加えてまとめられた論文集である。以下、章を追って紹介したい。

序章『栄花物語』概観。最初のかなの史書である『栄花物語』は『六国史』『新国史』に続く村上天皇から始まり、藤原氏発展の歴史が道長中心に書かれていること、編年体で史実を正確に編纂する意識があると同時に『源氏物語』の影響も強いこと、宗教人道長を描く巻十五以下は物語的価値が高い一方、歴史的意識は希薄になっているなどの概略を述べ、物語風史書と称するべきであると述べる。

第一章「世継および世継物語」では、世継とは代々の歴史を書き続けていくことを意味し、『栄花物語』『大鏡』ともに世継、世継物語と呼ばれたことは、編年体・紀伝体のかなの史書が完成したことを示すと述べる。

第二章『栄花物語』の編纂は、かなで編年体の史書が登場してくる背景、統括者を中心に編纂され年月日に誤りが少ないこと、史書としての特徴や史観、正編の編者赤染衛門説や成立年代などについて検討する。

第三章『栄花物語』の歴史と文学」は、説話採録の特徴、影子の入内による道長家の発展と中関白家の没落という対照性、平安時代の結婚の儀式と道長や一族の結婚の成功と特徴について述べる。

第四章『栄花物語』と王朝政治」では、巻一の村上天皇時代の実態を頼頼と師輔の対立を見据えながら分析し、後宮を通して九条家の発展と摂関政治が安定する過程に注目する。また、道長と対比される兄道隆一家、とくに長徳の変に言及し、巻四・五には史実との齟齬も多く、巻五は文学性が強まること、その背景も編者の立場をふまえ分析する。さらに、政治家としての道長と子孫に焦点をあて、九条家発展と外戚や「後見」が重視されていることを述べる。

第五章『大鏡』の歴史的意義」は、『栄花物語』の影響を受けて登場した紀伝体の史書『大鏡』について、後一条天皇の時代が中心であり架空の設定と改変や虚構があること、後見の重視は『栄花物語』の史観そのままであること、また新稿部分では天皇や源氏との結びつきも重視し、摂関政治の始終から天皇親政への歴史が描かれること、などの特徴を浮き彫りにする。

第六章『栄花物語』の歴史叙述」は、『栄花物語』の年紀表現と編年順の傾向との関係、編纂意識、原史料などについて分析する。

第七章『栄花物語』にみる藤原道長の周辺」では、宮中への参内をはじめとして道長と行動を共にすることの多い妻源倫子と、後見が弱いため三度も東宮になれなかった敦康親王に注目する。

新稿「書評 福長進著『歴史物語の創造』」。福長氏は時代背景、とくに九条流の発展を意識しつつ編纂・編年・原史料の問題を大きく取り上げており、史実を正確に書こうとした『栄花物語』の努力がより一層明らかになったと評する。

全体として、従来からの文学側の研究に多く言及され、古記録類をはじめ他の史料との照合も丁寧であるため、撰関期の研究に大変有益である。

かなの史書は『大日本史料』などにも採録されているが、かなで長編であるが故に読みにくく敬遠されがちである。しかし本書は史料としての価値と文学としての虚構性を具体的に示しており、他の文献には無い情報も多い物語風史書の魅力と有用性を改めて気づかせてくれる一冊である。

(川合奈美)